

明治維新百五十年・板垣退助薨去百回忌顕彰祭 募財趣意書

明治維新の元勳・板垣退助先生逝いて百年、時あたかも明治百五十年を迎えるに当り、今日、日本経済の世界的繁栄と成熟した民主主義国家としての姿を省みた時、先生の偉大なる業績に我々は感謝の念を抱かずにはおれません。

それと共に、百年後の今を生きる我々の置かれている国際的立場を考えた時、百年、百五十年前の先人が一命を懸けて成し遂げた経験と叡智、そして精神に学ぶことの意義を感じざるを得ないでしょう。

嘉永六年の黒船来航以降、内外の危機にさらされた日本の激動の時代、先生は土佐藩上士の中にあつて、世の動かんとする機を洞察し、時勢に耳を傾け、終始一貫、勤皇至誠の志を以て軍制改革を行い、鳥羽伏見の合戦の火蓋の切られるや、錦の御旗を奉戴し官軍諸兵を率いて、維新回天・王政復古の大業を成し遂げるべく戊辰戦争を戦い抜かれました。明治新政府の発足に際しては、参議として台閣に列し、日本を近代国家たらしめん為の重要政策を立案・樹立され、世界史上に類を見ない明治維新を完遂されたのです。

明治の初め、書契事件に端を発した外交問題の上奏が妨害されるや世論は激憤。先生は、西郷南洲翁等と共に敢然と官を辞し野に下りました。官吏六百余名もこの妨害に一斉抗議し辞職したのが世に云う明治六年の政変であります。

間もなく、佐賀の乱、西南の役等が起こると雖も、先生は心中深く想する処あり、これに組せず、欧米先進国の趨勢に独り眼を注ぎ、日本の今後進むべき途を熟慮して静かに策を練り、『五箇条の御誓文』の第一條「広く会議を興し万機公論に決すべし」という大御心の随々に民撰議院の設立を建白されました。これが自由民権運動のはじまりであり、日本の民主主義・議院内閣制度の起源であり、今日の自由民主党の源流でございます。

これより先、先生は真に国を思う同志たちと共に「愛国公党」を組織し、さらに進んで日本初の政治政党「自由党」を結成。推されてその党首となり、常に陣頭に立って全国を遊説し、近代日本に於ける議会政治の確立と民主主義思想の育成に盡力されました。然して、明治十五年四月六日岐阜・中教院における政談演説会終了直後、会場出口附近において先生は暴漢に襲われ、重傷を負われたにもかかわらず、生死の間を彷徨する苦痛に堪えて毅然たる態度を以て叫ばれた「板垣死すとも自由は死せず」の一言は、今も切々として我々の肺腑を貫き、日本の民主主義政治を語る上での永久不滅の名言たることは申すまでもありません。

明治政府もようやくこれらに動かされ、伊藤博文公を憲法研究のため欧州に派遣する等のことあり、ついに明治二十二年の紀元節を以て「大日本国憲法」の發布を見るに至りました。

先生は、第一回帝国議会より国会議員として在籍し、後には大命降下して内務大臣に任ぜられ、大隈重信公と共に日本初の政党内閣となる隈板内閣を組織して活躍されました。政界にその重きをなすこと十数年、ついに吾使命終れりとして後人にその席を譲り、常に淡々として俗世を超越して、名利を追わず、俗権に屈せず、清貧に安住して、古武士の風格を以て後輩を指導されつつ静かに余生を過されました。また、明治維新をはじめとする勲功により従一位勲一等に叙せられ、伯爵を授けられました。これに先立ち、授爵の内報を受くるや、これを拝辞すること二度、ついに明治大帝より優渥なる御沙汰を拝するに至り、恐懼にたえず謹んで拝受するに至りました。しかし先生は、一君万民を構想し、また一代の功を子孫が世襲し、蔭位を以て世に負担を強いることを憂いて「一代華族論」を提唱されました。

大正八年七月十六日、齢八十三歳を以て薨去せられた先生は、襲爵拝辞の旨を固く遺言状に認め置かれ、御遺族の方々も幾度かの襲爵手続きのすすめにもかかわらず、遂にこれを拝辞して爵位を返上。故人の高潔なる遺志を完うせられたのであります。

本年平成三十年はあたかも明治百五十年に相当致します折柄、今より凡そ五十年前に挙行されました、「明治百年・板垣退助先生薨去五十年墓前祭」に範り「板垣死すとも自由は死せず」たる不屈の板垣精神と先生の事蹟を深く顕彰し、広く次世代に語り伝え、板垣先生百回忌の記念法要を、一層意義あるものとしようとするものであります。

就きましては、右事情御賢察の上、格別の御高配をもちまして、皆様方の御篤志御寄附により右顕彰祭が滞りなく挙行出来ますよう、茲に御協賛方懇願申し上げます。

平成三十年正月十二日 愛国公党設立百四十五年に謹み記す

一般社団法人 板垣退助先生顕彰会

明治維新百五十年・板垣退助伯爵薨去第百回忌顕彰祭実行委員